Top Interview

社会性、人間性を高め、脳を活性化させる独自の教育システムを導入

メデュカパス校長
田村 和香氏

旧両国予備校で長年にわたり、医歯系大受験指導に携わってきたベテラン講師陣が設立した少人数制予備校が「メデュカパス」。毎年、全在校生の7割が医学部に合格するという驚異的な合格率を誇っています。この実績を維持している秘訣は何なのか、教育の特色を田村和香校長にお聞きしました。

脳を活性化させる「Input-Output方式」

―近年の医学部入試の動向からお聞かせください。

田村 センター試験利用入試を導入する私立医学部が増加したこともあって、これまで国立専願だった受験生が私立に数多く流入しています。社会人や文系学部卒業者の医学部再チャレンジも活発化しています。本校のグループ校でも2015年度、慶應の文系学部を卒業した社会人が獨協医科大学に合格しました。こうした状況から、私立医学部はますます難化しています。

もう1つの大きな特徴は、地域枠や奨学金を設けて、地域医療を志す優秀な学生を集めようという動きです。実際、近年の定員増の多くは地域枠に割り当てられています。背景には、高齢化の進行に伴って、地域医療の重要性が高まっていることがあります。今後の医学部受験生には、そうした国の施策や、社会のニーズも意識する必要があるでしょう。メデュカパスでは、患者さんに寄り添って治療できる、地域医療を担える医師、すなわち人間性、社会性を備えた医師になるために必要な能力を、受験生時代から高めることを教育の柱にしています。

―人間性、社会性を高めるために、どのような教育システムを導入されていますか。

田村 最も特徴的なのが、週2回、各80分の「Input-Output方式」授業です。生徒の学力、性格などを踏まえて、4～5人のグループを編成。生徒1人約20分、自分で選んだ問題を解説する授業です。脳科学者と対話を重ねて開発した方式で、それまであまり使用していなかった脳の部分の活性化が期待できます。たとえば、他の生徒に分かりやすく説明するためには、通り一遍の理解では不十分で、頭の中で知識を再整理して、コンパクトにアウトプットできるように準備する必要があります。知識の深化につながるわけです。また、